

龍樹造・中論無畏疏 (前續)

寺本 婉雅 譯註

「觀法品」第十八 (Atma-dharma-Pariksa)<sup>①</sup>

此に(問ふて)言く、ならば眞性 (tattva, De-kho-Na) の相は何ぞや。何の方法に由つて眞性(理)を觀察(別)し得るや。

此に釋して曰く、我 (ātma, bDaḡ) と 我所 (Ātmīya, bDaḡ-Gī) とを離れたるものは眞性の相なる故に、正理を先に與へて悉く觀察(別)するが故に眞性は觀察せられ得べし。若し云何にと云はゞ、釋して曰、

①「若し蘊は我にてあるならば、 //Gal-Te Phun-Po bDag Yin-Na/

生と滅とを有すべし」 /Skye Dan ljig-Pa-Can-Du hGyur//

②「若我是五陰 「若し蘊が我であるならば //Amā skandha yadi dhaved

我即爲生滅」 (我は)生滅を有するものとな udaya vyaya-bhāg bhavet/

/Wenn die Gruppen (skandha) das Ich wären, so wäre es mit Entstehen und Vergehen

behaltet. / (p. 109).

若し諸蘊は「我」(bDag-'Nid; 我性)にてあり得るならば、斯ては生と滅との法を有するものとなるべし。諸蘊(以下原文 p. 81b)は生と滅との法を有すればなり。「我」は生と滅との法を有するものならば、かの凡ての無常(anityata, Mi-Rtag-Pa)の過失に墮すべし。そは煩を離るゝが故に説明されず。

① 梵——*ātma-pariksa* (我觀)。

② 次偈と共に第一偈をなす、滅梵は次偈と共に出づ。

③ *bhaga* (部分), *Can-Dat*。

般若燈論——「若我是陰相、即是起盡法」

中觀釋論——「蘊中若有我、有即生滅分」

(1) 「若し諸蘊より別ならば、

蘊の相は無となるべし」。

① 「若我異五陰、若し我が諸蘊より別ならば

則非五陰相。」 蘊相は無となるべし」

//Gal-Te Phun-Po Rnams-las gShan/  
//Phun-Po'ji mTshan-'Nid Med-Par-hGyur//  
//Skandhebyo'nyo yadi bhaved  
bhaved askandhata kṣaṇah / (p. 341).  
/Wenn von den (ruppen (skandha) verschieden, so wäre es ohne skandha-Merkmale. / (p. 102)

若し我は諸蘊より別ならば、斯ては蘊の相に非ざるべし。諸蘊より別なるものは常なればなり。我は蘊の相に非されば、かの凡ての常の過失に墮すべし。そは亦煩を離るゝが故に説明せられず。何

故か。是の如く能く觀察(分別)せば、我は二者の如く亦認められざればなり。

① 前偈と共に第一偈をなす。漢梵は前偈と共に出づ。

② 梵偈 *Bhaved askandha.....*。漢譯「非」。藏釋 *Ma-Yin-Pa*。(非なること)

般若燈論——「我若異諸陰 是則非陰相」

中觀釋論——「若異蘊有我 有即非蘊相」

②①「我性あることなくば、

我所は何處にか有らん。」

「若無有我者」

何得有我所。」

「我の有らざること」

我所は何處にか有らん」

*kuta eva bhaisyati/* (p. 345).

// *bDag-Nid Yod-Pa Ma-Yin-Na/*

// *bDag-Gri Yod-Par Ga-I.a hGyur//*

③ // *Ätmany asati ca-ätmnyani*

*/Wenn das Ich(ätman) nicht existiert, woher sollte „Mein“ (ätmīya) existieren?/* (p. 102).

觀察するに、是の如く我性(*bDag-Nid*)は一切相に於て認められねば、我所(*ätmīya*, *bDag-Gri*)は何處にかあらん。是の如くかの我と名けらるゝ凡てのものを我所なりと云はゞ、かの我なきが故に「彼は此なり。」と云はるゝことは認められざればなり。是の如く我と我所なきものは眞性の相性なり。

① 次偈と共に第二偈をなす。

② 藏——*bDag-Nid*, 梵——*ätman*. 漢譯我。

③ 次偈と共に出づ。

般若燈論——「我既無所有、何處有我所。」

中觀釋論——「若或無有我、我所當何有。」

①「我と我所との寂滅の故に、  
//bDag Dan bDag-Gi Shi-Gi Shi-Bahi Pkyir/

②「我執と我所との執なかるべし。」  
/Nar-hDsin Na-Yir-hDsin-Med-hGyur/

③「滅我我所故  
/Nirmanmo nirahankārah

「我と我所との寂滅の故に  
gamād atma ātmanāyoh// (p. 327).

/Aus dem Erlöschten (eig. Beruhigung) von Ich und Mein (fehlt) Fehlen von Ich-Vorstellung

(ahankāra) und Mein-Vorstellung (mamakāra) / (p. 103).

是の如く我と我所とに顯に耽着するを寂滅するが故に、そこに我執と我所との執は無くなるべし。  
是の如く我を顯に耽着することに緣りて<sup>④</sup>(bRten-nas)我執となり、我所を顯に耽着することに緣り  
て我所の執となるが故に、何が故とならば我を顯に耽着することを寂滅す、この故に我執は無とな  
るべし。我所を顯に耽着することを寂滅す、この故に我所の執は無となるべし。

① 前偈と共に第二偈をなす。

② 梵——ahankāra, mamakāra. 滅——Nar-hDsin (我執、我持、我れがと執す) Na-Yir-hDsin (我所執、我所持、  
我れのもの執す)、漢譯我智。

③ 漢、梵共に前偈と一緒に出づ。

④ 原文 Rten は dRten の誤寫。

般若燈論——「無我、無我所、我執得永息。」  
中觀釋論——「無我、無我所、我、我所即滅。」

此に(問ふて)言く、「誰かに依つて眞性を見るならば、我執と我(p. 81b 以下原文)所の執とは無となるべ

し」と云はるゝ其者は我なるが故に、我は有るが故に我所も亦有るなり。此に釋して曰、

③「我執と我所の執なき何人も  
// Nar-ḥDsin Na-Yir-ḥDsin-Med Gan/

そは亦有ることなし  
/De Yan Yod-Pa Ma-Yin-Te/

我執と我所の執なきを  
/Nar-ḥDsin Na-Yir ḥDsin-Med-Par/

何人も見るものは見ざるなり。」  
/Gan-Gis mThou-Ba Mi-mThou-No//

「得無我智者  
// Nirnamo nirahaṅkāro

是則名實觀  
yaḥ ca so'pi na vidyate./

得無我智者  
Nirnamān nirahaṅkāraṇi

是人爲希有。」  
yah paḥyati na paḥyati // (p. 318)

/Wer auch ohne Ich-Vorstellung und ohne Mein-Vorstellung ist, der durch existiert nicht.

Wer einen von Ich-Vorstellung und Mein-Vorstellung Freien schaut, der schaut nicht. / (p. 103)

是の如く我執と我所の執なしと云はるゝかの凡てのものは亦有ることなし。我執と我所の執なきを見る故に、邪見に由つて智眼を損害するものは是れに由て眞性を見ざるなり。

① 前偈の②を見よ。

② 梵、藏偈缺

般若燈論——「得<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>所、不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>法起滅。無<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>故、彼<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>見。」

中觀釋論——缺

(4) 「内と外とに於て

我と我所とが滅盡すれば

近取は滅すべし

その(近取)が滅盡するが故に生は滅盡す。」

「内外我、我所

盡滅無有故

諸受即爲滅

受滅則身滅」

//Nai Dai Phyi-Rol-Nid Dag-I a/

/bDag-Dai bDag-Gir Zod-Gyur-Na/

/Ñe-Bar-I-en-Pa hGag-ñGgur-Shin/

/De Zed-Pas-Na Skye-Pa Zed//

//Nlamey aham-iti kñjñe

balirikhādhyātman eva ca/

Nirudhyata upādānañ

tat kṣayañ jñānañ kṣayañ// (p. 349)

その(近取の)滅盡より生の滅盡あり」

我と我所との盡せしとき

近取は滅盡す

/Bei Innerem und Äußerem, Wenn „Ich“ und „Mein“ geschwunden (kaśīna) ist, Wird Annehmen (upādāna) vernichtet (nirudhyate) ; wenn das zerstört ist, ist Geburt (janman) zerstört // (p. 103.)

是の如く内に於て我を顯かに耽着し、外 (Poyi-Rol-Nid) に於ても我所を顯かに耽着することを滅盡すれば四種の取は滅すべし。それを滅するが故に有 (bhava, Srid-pa) は滅盡すべし。有が滅盡するによりて生は滅盡す。そは補特伽羅 (Pudgala, Gran-Zag) の無我の眞性 (tattva, De-ko-Na) を觀察 (分) する果は煩惱障 (kleśa-āvaraṇa, Non-Moñs-Baḥi Sgrib-pa) を斷するに由て分別する有餘蘊涅槃 (Sopadhi-geṣa-nirvāṇa, Ihaḡ-Ma-Dai-b-Cas-paḥi Mya-Nan-I-as-hDas-pa) なる。

- ① 本偈譯——「我と我所とが思惟を滅盡せし」(bDag Dañ bDag-Gir Sñam-Zad-Na)  
梵——janman, 藏——Skye-Ra. 漢譯身  
般若燈論——「得盡我我所、亦盡内外入、及盡彼諸取、取盡則生盡。」  
中觀釋論——缺

今は法無我の眞性を觀察する果は、所知障 (jñeya-āvaraṇa, Ces-Byaḥi Sgrib-Pa) を斷るに由つて分別する有餘蘊涅槃 (nirupadhi-geṣa-nirvāṇa, Ihaḡ-Ma-Med-Paḥi Mya-Nan-I-as hDas-Pa) なり、(是れを) 得る法便を教示せん爲めに釋して曰、

⑤「業と煩惱との滅盡によつて解脱あり

//I-as Dan Non-Mlois Zai-Pas Thar/

業と諸煩惱とは分別より(起る)

/I-as Dan Non-Mlois-Rnams Rlog-I-as/

其等は戯論<sup>②</sup>よりす、戯論は

/De-Dag Spros-I-as Spros-Pa-Ni/

空性に由つて滅せらるべし。』

/Ston-Pa-Ñid-Kyis h(rag-Par-hGyur//

「業煩惱滅故

「業と煩惱の滅盡より解脱あり

//Karma-kleca-kṣayan mokṣā (p.319).

名之爲解脱

業と煩惱とは分別より起る

karma-kleśā vikalpatāh/

業煩惱非實

其等は戯論よりす

Te prapañcā prapañcas tu

入空戯論滅。』

戯論は空性に於て滅す。』

gūnyatāyān nirdayate// (p.350).

/Durch Schwinden von Yat (Karma) und Qualen (kleśa) ist Erlösung(mokṣa) ; durch Vor-

ellun(vikalpatāh) von Tat und Qualen,

Werden diese aus Entfaltung (prapañcā) edtfaltet (prapañcita), durch Leerheit (śūnyatā)

werden sie zerstört./ (p.104).

此處に、業と煩惱とは生の因なるが故に、其等を(滅)盡せるに由つて苦より解脱(vimukti, Rnam-par Grol-Ba)なることは(即是れ)解脱(mokṣa, Thar-Ba; 自由)なり。是れに由つて、有餘蘊涅槃界に入ると教へらる。かの業と煩惱とは分別(Vikalpa, Rnam-par Rlog-pa, 觀察)より發生す。其等か



有るとき發生せざればなり。それ等の分別は戲論より發生す。言説の眞實(yavahāra-satya, Jha-Snād-Kyi bDen-pa, 俗語、名目)に能く耽着する相の戲論より發生せざればなり。戲論は空性<sup>④</sup>によりて滅せらるべし。法無我の相を觀察するに由て滅せられべし。是に由て無餘蘊涅槃界に入ると教へらる。

① 梵——Ylka'patsh(妄想、分別)、藏——Rlog-Pa(釋文 Rnam-Par-Rlog-Pa)、漢僞譯缺、釋文に「憶想分別」とあり。「觀六情品第三參照」

② 梵——Prapañcit. 藏——Spros(-Pa)、漢譯戲論。

③ 本偈の釋文よりも第七偈の釋明文に於てよく説明さる。

④ 原文 Kyi:今は Kyisに譯せり。

⑤ 獨譯——「業と煩惱との滅によりて解脱あり、これらは業と煩惱との分別によりて、戲論は戲論せられ、これらは空性によりて滅せらる。」

般若燈論——「解脱盡業惑、彼苦盡解脱、分別起業惑、見空滅分別。」  
中觀釋論——「諸業煩惱盡、即名爲解脱、而彼業煩惱、從分別中生。」

此に(問ふて)言く、「我ば唯有るなり。」世尊に依つて我(aṃan, bDaṃ)は有るが故に説き給ひしなり。此に釋して曰く

⑥ 「我なりとも亦假托せられ

// bDaṃ(-r)-Shes Kyah bJags(-tyur-Cin/

無我なりとも亦教へらるべし

//bDag-Med-Ces Kyai BStan-Par-It'gyur/

諸佛によりて我と

/Sais-Kgyas-Rnams-Kyis bDag Dahi-Ni/

無我とは決してなしと教へらる

/bDag-Med-Pa h'rah-Yai Med-Par-BStan//

「諸佛或説我

「我なりと假托せられ

//Ätmety api prajñayitani

或説於無我」

無我なりとも示されたり

anätmety api deçitan/

諸法實相中

諸佛によりて如何なる我もな

Buddhair na-ätmā na ca-anätmā

無我無非我」

如何なる無我もなしと示され

kaç cid ity api deçitan// (p.355).

/"Selbst (Ätman)" auch wird erkennen gelehrt, "Nicht-Selbst (anätman)" auch wird gelehrt,

Von den Buddhas wird aber Nichtsein van irgendwelchem Selbst und Nicht-Selbst gelehrt./

(p. 105).

佛世尊は諸有情の思惟(ācāya, bSam-pa, 思已)と隨眠(anuācāya, Bag-ta-Nal)とを知り給ふ故に、諸智(mKhas-Pa Rnams)を以て彼此の化度を如實に觀じ、あらゆる化度に於て「此の世間はなし、彼の(Pha-Roi)世間はなし、有情は變形して生は無し」と考ふる、是の如き見を生じたるもの、無我の見を退轉せんが爲めに「我なり」とも亦假托せられたり。あらゆる所化に對しては諸善不善業の作者と其等の果を食するもの(受くる)と、繫縛と解脱とを教へしむるところの彼の我と云へば或者に存

すと思惟す。是の如きを見が生じたる彼等の我見を退轉せんが爲めに無我とも亦教へられたり。善根の聚は成就し、有(bhava, Srid-pa, 三有)の河より渡り得る眞諦の語界(Katha-bhāṣana-bhūta, s'Tam-gyi Snod)となれる彼等の賢き所化に對しては、我と無我との何ものもなしと教へ給へり。

又は別に分別して、或外道は行(Samskṛta)は「我なくして、各刹那(以下原文 p. 82b)に破壊の性質(Nai)を有し、若くは別時に決住するものに於ては、「我」が無なれば業と果とはなしと分別して、行は破壊せらるを(恐るに)由て、「我」なりと亦假托せらるべし。あらゆる他のものは此れは身と根と覺(bodhi, mati, Blo)との聚集のみに盡きたるを、此には因と果とより分別せらるゝも。我は自性(svabhāva, No-Bo-Nid)によりて無なり。數ふるところの衆生の「行」は無我にして決定して住せず、住せざる此等のものに於ても亦輪廻は認むべからずと云へるを知つて、因と果との結合に惑ふものなれば、無我なりと亦教へらる。

佛世尊は一切法に於て陰蔽せざる(apurokṣa, Thog-Tu)諸智を以て(以下原文 p. 82b)我と無我とは決してなしと説き給へり。

① 本偈 譯——「無我とは決してなしと亦教へらる」(b'Day-Med b'ri-shi-med-Ces k'yan bStan)

般若燈論——「爲レ彼説レ有レ取、亦説レ於レ無我、諸佛所説證法、不レ説レ我、無我。」

中觀釋論——「一切如是故、餘法亦復然、無定意分別、無定放差別。」

此に問ふて言く、戲論 (Prapañca, Spros-Pa) は空性に由つて滅せらるべしとのかの釋に於て如何なる正理ありや。此に釋して曰く、

(7) 「説明せらるゝものは退轉するが故に」 // bRjod-Par-Bya-Ba ldog-Pas-Te//

② 諸法實相者 「語られるものは滅しつゝ」 // Nirvytam abhidhāvayam / (p. 364).

/Das zu Benennende ist besichtigt (nivṛta, widerlegt). / (p. 106)

言語を以て説明せらるゝ物、瓶と毛布と車等は空性なりと見るが故に、戲論は滅せらるべし。此に説明せらるゝものを觀察するが故に、虛妄假托 (adhyāropa, Sgro bTags-Pa) より説明する我性の戲論は無量に發生す。故に一切の存在(物)の自性は非常に閑寂なる相にして、突性は虚空の如く、無作證 (asākṣātkṛiyā, mNon-Sun-Du Byed-Med-Pa) の方法に由つて作證し、一切の存在(物)は説明すべからずと見る時、説明の我性の戲論は滅せらるればなり。

① 本偈譯——bzlog-pa-ste (相違して)。

② 般若燈論——「爲說息言語。」中觀釋論——「此所說想法。」

③ 梵偈第四句——「法性」(dharmaṭṭā, Tib. Chos 'Nid) は漢譯實相の對譯。

そは又説明せらるゝものは云何ぞ退轉せらるべしと云ふや。釋して曰、

⑦「心の心境は退轉せらるゝが故なり」 //Sens-Kyi Spyod-Yul I-log-Pas-So//

①〇「心行言語斷」 「心の境界が滅するとかに」 /nivyite citagocare/

/Durch Entfernung des Gegenstandes des Denkens (citagocara) ./ (p.106).

心の行境、色等は無自性なりと見るが故に、説明せらるゝものは退轉せらるなり。そは亦眞諦に於て成せざるが故なり。此處に如實に如實の見を得る時、説明せらるゝものは退轉するが故に、眞諦智を得れば心の行境は退轉す。

① 般若燈論—「斷彼心境界」。 中觀釋論—「想即心境界。」

かの心の行境は亦云何に退轉せらるべしと云ふや。

⑦「不生と不滅とにして //Ma-Skyes-Pa Dai Ma-tGag-Pa/

法性は涅槃に等し。』 /Chos-Nid Mya-Nan-tDas Dai mTshinis//

①「無生亦無滅」 「實に不生と不滅とにして /Anutpannā-aniruddhā hi

寂滅如涅槃。』 法性は提婆の如し nirvāṇam iva dharmatā.// (p. 36d).

/Die nicht entstandene und nicht-vergangen Objektivität (dharmatā) ist dem nirvāṇa gleich./ (p.107)

心の行境、色等は不生にして不滅なり、法性は涅槃に等しと能く知るが故に、心の行境は退轉す。

此に問ふて曰く、眞諦に於て一切の存在(物)は不生不滅にして、法性は涅槃に等と云ふ、世間の言説に教ふる方法は云何、此に釋して曰、

(8)「一切は如實と非如實なり

如實にして非如實なり

非如實にも非ず、如實にも非ず

そは諸佛の教なり。」

「一切實、非實、  
一切は如實なり或は非如實なり

亦實亦非實、  
如實にして亦非如實なり

非實、非非實、  
非如實にも非ず、如實にも非ず

是名諸佛法、  
是れ諸佛の教なり」

/Alles ist tatsächlich (tathya), ist nicht-tatsächlich, ist tatsächlich und nicht-tatsächlich,

Ist weder tatsächlich noch nicht-tatsächlich: das ist die den Buddhas gemäÙe Lehre./ (p 107)

一切は如實なりと云はるゝは、眼等の諸處(Ayatāna, Skye-mChed)と色等の諸境とが言説の諦

//Thams-Cad Yan-Dag- Yan-Dag-Min/

|Yan-Dag Yan-Dag-Ma-Yin-Nid/

/Yan-Dag-Min-Min Yan -Dag-Min/

/De-Ni Suis-Rgyas-Rnams bStan-Paño//

//Sarvam tathyanī na vā tathyanī

tathyanī ca-atathyanī eva ca/

Naiva-atathyanī naiva tathyanī

etad buddhānuśāsanāni./ (p. 369).

(avyavahāra-satya, Tha-Snad-Kyi bDen-Pa, 俗諦)と相違せざるに存すればなり。「非如實」と云はるゝは、眞諦に依止して生ずるものは幻影の如く、自性全く成せざるが故に、云何なる所現も是の如く存することあらざればなり。「如實にして非如實なり」と云はるゝは、二諦の方法に觀待(因待)すればなり。③「非如實にも非ず、如實にも非ず」と云はるゝは、觀待の時に於て瑜伽者(Yogin, Rnal-'Byor-Pa, 觀行者)は一切の方法にて一切法の眞性を能く觀察せざればなり。

又「一切は如實」と云はるゝは、世尊は煩惱障を離れんが爲めに、内と外との處(入)は、我と我所とを離れたるところの動搖なき相性なりと知るべしと教かれたるなり。「非如實」と云はるゝは、識(vijñāna, Rnam-Par-'Ges-Pa)の相性の我(自體)は我と共なる故に、そして我所なる故に、作者なりと說明せらるゝが故に、聞(gravana, Nan-Pa)と思(cetanā, cintanā, Sems-Pa)と修(Dhāvanā, bSgom-Par-Byed-Pa)と(以下原文)なり。「如實にして非如實」と云はるゝは、世間と教法の言説に觀待するものなり。「非如實にも非ず如實にも非ず」と云はるゝは、眞諦の方法によりて、一切法は無生なるが故に、分別智('Ges-pa Rnam-par 'Ktoḡ-pa)と共に、無分別の行境となるに(非ず)。存在(物事)の方法によりて非如實なりと分別せられ、而して如實なりと分別せらる。是の如きものは無きなり。「その諸佛の教なり」と云へるは其等の四種④の次第に由て有情の利益を如實に得られんが爲め教へを起し給ひし彼の總てのものは、佛世尊の教なり。此れに由て衆多の弟子達に對し、根と思已(Acāya, bSam-

Pa, 思惟)と、隨眠 (anuṅgaya, Bag-Ia-Nal) と時々に准して (vaḥana, dPañ-Gi)、天と解脱との道を不顛倒に隨教によりて教へ給へるなり。

① 本偈——「そは佛の隨教なり」(De-Ni Sais-Rgyus Kyas-Bsan-Paho) 今は梵漢兩偈の「諸佛」に従ひて「諸」に改む。

② 獨譯——「非如實と非如實となり」(Tse nicht tatsüchlich und nicht-tatsüchlich. p. 107) は誤譯。

③ 四句分別。

④ Yeḥana, dBan-Gi——Ya'a (權力) (dBan(權力)の屬性)の結果として、「の爲めに」「に准じて」の諸義あり。

此に問ふて、言く眞性の相は何ぞや、此に釋して曰、

(9) 「他より知られず、寂定にして

//gShan-las 'ces-Min Shi-Ba Dan/

諸戲論に由つて戲論せられず、

/Spros-Pa-Rnams-Kyis Ma-Spros-Pa/

分別(觀察)なく、異義に非ず

//Rnam-Rtogs-Med Don Tha-Dad-Min/

そは眞如の相性なり。」

//De-Ni De-Nid m'iShan-Nid-Do//

「自知不隨他、

//Aparapratyayam gāntaui

寂滅無戲論、

戲論によりて戲論せられず

prapañcair aprapñcitan/

無異無分別、

分別を離れ、異義に非ず

Nirvikalpan anārtānam



是則名實相。」 是れ眞性(眞理)の相なり。」

etat tattvasya laksanam.// (p. 372).

/Nicht von anderem abhängig(eig. von andrem aus erkannt), still(erforschen, fūnta), durch Entfaltungen (prapñca) nicht entfalteter,

Ohne Unterscheidung, nicht-vielheitlich, das ist das Kennzeichen der Lehre.// (p. 108).

「他より知られず」と云はるゝは、是れ他より知られること無しとなり、教訓なしに自から證し、自知せらるべしと云はるゝ説なり。「寂定」と云はるゝは、自性(svabhāva, No-Bo-Nid)を離るゝが故なり。存在(物)の自性と特殊境とに於て分別(觀察)の行境に非ざればなり。「諸戲論に由つて戲論せられず」と云はるゝは、顯に説明されたる相性の戲論は寂靜なればなり。「分別(觀察)無し」と云はるゝは、示現なきものに由つて(anabhasatvena, Smai-Pa Mel-Pa Nid-Kyis)「此れなり、彼なり」と分別せられざればなり。「異義に非ず」と云はるゝは、法性は一味(ekarasatvst, Ro-g-Cig-Pa)の故に、義を分別すること無きなり。

又分別(觀察)(以下原文 以下原文 以下原文)なし、<sup>②</sup>この故に諸戲論に由つて戲論せられ、何故とならば、諸戲論に由つて戲論せられず、この故に寂定なり。何となれば寂靜なり、此の故に異義に非ざるなり。何故とならば異義に非ず、この故に他より知られざるなりと法門(註解)の語に於て教かれたるものにして、是れ眞相の相なり。

① 原文 Las (よりて) 梵 pratyaya (緣りて)

② 原文 Dehi. 今は Dehi-Phyir の意に譯せり。

般若燈論——寂滅無他緣、戲論不能說、無異無種種。  
中觀釋論——若他信寂靜、無戲論所戲、無異無分別。

是は又眞性の他の相なり。

(10) 「何かに緣りて何かを生ず

そは且らく其者に非ず。

其より別なるものにも亦非ざる故に、

この故に斷に非ず、常に非ず。」

「若法從緣生

「何かに緣りて何か有るところ  
の」

不即不異因

その者はその限りそれに非ず

是故名實相

又別のものにも非ず

不斷亦不常。」

それ故に斷に非ず、常に非

/Wenn etwas abhängig von etwas entsteht, so ist es nicht eben dieses,

Auch ist es nicht davon verschieden; deshalb ist es nicht abgeschnitten, auch nicht ewig.

//Gai-I-as bRten-Te Gai-Byuir-Ba/

/De-Ni Re-Shig De-Nid-Min/

/De-I-as gShan-Pahañ Ma-Yin-Plyir/

/De-Plyir Chad-Min Rtag-Ma-Yin//

/Pratiya yad yad bhavati

na hi tāvat tad eva tat/

Na ca anyad api tat tat tasmāñ

naucchinnañ nāpi gāvatam// (p. 375).

(p.109)

是の如く「何にかに縁りて何かを生ず」、「そは且らく亦其者にも非ず」、「其より別なるものにも亦非ざるが故に」、亦斷にも非ず、亦常にも非ず。

般若燈論——「從緣所起物、此物非緣體、亦不離彼緣、非斷亦非常。」  
中觀釋論——「若法從緣有、不而即是因、亦不異於因、故非常非斷。」

此の分別 (kalpanā, brtag-pa 觀察) に由つて一義に非ず、異義に非ず、斷に非ず、常に非ずと教

示せらるゝなり。

(11) 「一義に非ず、異義に非ず」<sup>①</sup>  
斷に非ず、常に非ず、<sup>②</sup>  
<sup>③</sup>  
<sup>④</sup>

そは佛、世間の

師の教は甘露なり。」

「不<sup>⑥</sup>一亦不異、  
「一義に非ず、異義に非ず

不常亦不斷、  
斷なく、常なく

是名諸世尊、  
是れ世の導師の

//Don gCig-Min Don Tha-Dad-Min/

/Chad-Pa Ma-Yin Rtag Min-Pa/

/De-Ni Sans-Rgyas ljig-Rten-Gyi/

/mGron-Pohi bStan-Pa bDud-Rtsi-Yin//

//Anekārtham anānārtham

anucochedam acāvatam/

Erat tae loka-nāthānāni

教化甘露味<sup>⑦</sup>」

諸佛の教の甘露なり』

buddhānaṃ gāsanāmitāṅṅaṃ // (p. 377).

/Nicht-einheitlich, nicht-vielheitlich, nicht-ageschnitten, nicht-ewig :

Das ist des Buddha, des Weltbeherrschers, Lehr-Amprosia / (p. 109).

是の如く、天と解脱との道を詳かに開くことは、一義に非ず、異義に非ず、斷に非ず、常に非ず、最勝甚深なる勝義 (paramārṭha, Dor-Dam-Pa) の眞性 (tattva, De-Kho-Na) を明瞭ならしむ。そは佛、世尊、世間の師の教にして甘露を得るの因なり。

① 梵 an — 藏 Min(非)、漢 不。

② 梵 an — 藏 Min(非)、漢 不。

③ 梵 an — 藏 Ma-Yin(非)、漢 不。

④ 梵 a — 藏 Min(非)、漢 不。

⑤ 梵 漢 — 複數(諸佛)、藏は單數(釋文同)

⑥ 中觀釋論 — 「無一義、多義」

⑦ 般若燈論 — 「最上甘露法」 中觀釋論 — 「正法甘露味」

⑫ 「圓滿なる諸佛は出現せず

諸聲聞も又滅盡することをも

辟支佛の智は

// RDoogs Sais-Rgyas Ma-Dyul-Shin/

/Nan-Thos-Rnams-Ni Zed-Gyur Kyan/

/Rah-Sais-Rgyas-Kyi Ye-Ces-Ni/

④ 依止よきよりなり能く生ず。

//bRten-Pa Med-I-as Rab-Tu-Skye//

「若佛不出世

」諸正等覺者の出世せざるに於て

//Sambuddhānām anupāde

佛法已滅盡

又諸聲聞の滅盡に於て

grāvakānaṃ punaḥ kṣaye/

諸辟支佛智

諸の獨覺の智は

Jñānaṃ pratyekabuddhānām

從よ於遠離よ生。

遠若よら生よ轉よた

asaṃsargāt pravartate. // (p. 378).

//Wenn vollendete Buddhas (sambuddha) nicht erstehen, die Hörer (śrāvaka) auch schwinden,

Dann tritt aus Beziehungslosigkeit (asaṃsarga) die Kenntnis (jñāna) der Einzelbuddhas (pratyeka-

buddha) hervor. / (p. 109).

此の修習せざる諸聲聞の中に於て、百(歲)中に圓滿なる諸佛は出現せず、或は諸聲聞滅盡して縁

(Rkyen 條件)を有せず終らば、

亦彼等の先に修習せるところの因より出現する獨覺(辟支)の智

は他より知るに非ず、只依止(佛)なきのみの縁(條)より能く生ずべし。

この故にかの甘露の教は諸の成就者に對し、此(世)の生(命)と彼(世)の生(命)と(以下原文 p. 84b)とに於て、甘

露の位を得せしむることあるが故に、自己に善き諸の望みを以て思惟の紐索にて是れを成就せらる

べきなり。

① 梵、藏は複數。漢は單數。

② 梵、藏は「諸聲聞」、漢は「佛法」なり。

③ 藏は單數、梵、漢は複數なり。

④ 藏は *bRten-pa Med*、梵は *asamsarga*、漢は「遠離」なり。

般若燈論——「法佛未出世、聲聞已滅盡、然有辟支佛、依寂靜起知。」  
中觀釋論——「正覺不出世、聲聞復滅盡、彼緣覺正智、從於厭離生。」

阿闍梨耶、聖龍樹によりて造られたる「根本中論無畏疏」内、「我と法を觀ず」と名けられて、第十  
八品なり」(*bDa'ag Dahi Chos bRtag-pa Sho-Bya-Ste, Rab-Tu-Byed-pa bRtag-pa'ho*)